



死生学の未来

□会場 東洋英和女学院大学大学院
(六本木) 201教室
東京都港区六本木5-14-40

□最寄駅 六本木駅(日比谷線徒歩10分)
麻布十番駅(大江戸線徒歩5分、南北線徒歩7分)

□問い合わせ 死生学研究所 shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp

□先着 100名様
□事前申込み 不要
□参加費 無料

第5回連続講座

7月20日(土)

14:40-16:10 (受付14:10~)

■プロフィール

国際基督教大学大学院修了(Ph. D.) 静岡県立大学、札幌学院大学を経て2017年より現職。アメリカ南部の公衆衛生行政史を専門とする。

■主要業績

『医療化するアメリカ—身体管理の20世紀』彩流社、2017年(共著)。「20世紀転換期アメリカ合衆国ノースカロライナ州における天然痘流行と公衆衛生インフラストラクチャー構築の試み—より安全な種痘のための基盤整備にむけて」東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』第36号、2019年

平体由美

(ひらたい ゆみ) 本学国際社会学部教授

「健康」とはどのような状態のことか

—アメリカ史に見る「健康」と「病」の変遷

内容紹介：

健康でありたい、病気に悩まされたくない、というのは人が普通に願うことです。ところで「健康」とはどのような状態のことを言うのでしょうか。WHO憲章によれば「健康とは……肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」とされています。これをもって健康というのならば、ほとんどの人は不健康となるような気がします。本講演では、20世紀前半のアメリカにおける「都市の生活は農村の生活よりも不健康である」という理解を歴史的に検討し、「健康」の概念がどのように変化してきたのかを、「病」と対比しながら検討します。

第6回連続講座

7月20日(土)

16:20-17:50

■プロフィール

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了(文学博士)。本学非常勤講師などを経て、2015年4月より現職。専門は宗教学・死生学。ドイツを中心とした宗教学の学問史、宗教学理論・方法論研究、医療分野におけるスピリチュアリティ研究など。

■主要業績

『祈り』国書刊行会、2018年(共訳)。『祈りの現象学—ハイラーの宗教理論』ナカニシヤ出版、2014年(単著)。『宗教史とは何か【下巻】宗教史学論叢13』リトン、2009年(共著)。『シリーズ生命倫理学4 終末期医療』丸善、2012年(共著)。

宮嶋俊一

(みやじま しゅんいち)

北海道大学大学院

文学院准教授

死者と共にあるということ

—北海道における独居高齢者調査を参考に

内容紹介：

私はこれまで、宗教学・死生学の領域から、生と死について考えてきました。近年は、北海道内の独居高齢者にインタビュー調査を行いながら現代に生きる人々の死生観について考察を重ね、「生者と死者との関わり」という研究課題も見えてきました。元々一人暮らしを続けていたという方を除けば、独居に至った原因として多いのは配偶者との死別です。ですが「別れた」とは言え、その存在をまったく消去できるわけではありません。広い意味での宗教的な行為が、独居高齢者にとって重要な役割を果たしていることも感じてきました。今回は、こうした研究成果の一端をお話できればと思います。

〈予告〉 10月12日(土) 開催 〈公開〉 シンポジウム「死の受容と悲嘆のケア」

玉置妙憂「医療と宗教の協働—両輪そろってこそその穏やかな看取り—」

高橋悦堂「私の死生“感”—主に終末期緩和ケアと東日本大震災の活動から—」

奥野滋子「お迎えされて人は逝く—終末期医療の現場から—」

